

「九州派機関誌三号」

山内重太郎

かつて私は、ある学者から『真の認識とは、我々の意識から全く独立した、存在そのものの言葉に耳を傾けることである』ということを知られた。勿論、この言葉は、哲学の認識を言ったものであるが、私はこの言葉から、作画上にも、大きな示唆を得たのであった。

私は、自分の絵画に生々しい物質のもつ、物質そのものの不可思議な存在感、自分の生命によって捉えた「もの」そのものの言葉を、自分の、最も高次の方法によって語らせた。私は、それを表現するためには、あらゆる素材と、あらゆる方法を駆使しなければならないと考えている。

私は、今後ともに、こうした追究を進めていって、私の作品に、世界そのものの持つ深い意味と、神秘的な言葉を語らせたいと希うのである。